

李朝實錄 第三十七冊

顯宗實錄

學習院東洋文化研究所刊

李朝實錄第卅七冊奧付

昭和三十八年十一月二十五日

東京都港區芝南佐久間町一ノ五三

笠井出版印刷社印刷

東京都豊島區目白町一ノ一〇五七

學習院東洋文化研究所刊行

編纂刊行責任者 末松保和

新學堂
PDG

顯宗実録解説

〔一〕 李朝の第十八代の王顯宗は、諱は櫛、字は景直、孝宗の第一男、仁祖十九年辛巳（一六四一）二月四日己酉、瀋館（清国の首都瀋陽）に生れた。二十二年甲申、還国、二十七年己丑、王世孫に封ぜられ、孝宗二年辛卯、王世子に進封、十年己亥（一六五九）五月九日己巳、昌德宮に即位、在位十五年、甲寅（一六七四）八月十八日己酉に薨じた、春秋三十四。母は仁宣王后張氏（徳永、張維の女）、妃は明聖王后金氏（清風、金佑の女）である。

〔二〕 この王代の実録は肅宗元年（一六七五）に、編修開始、三年（一六七七）九月に、印刷を完了した。二十二卷二十二冊。附録一卷一冊。

〔三〕 附録は、行状・哀冊文・諡冊文・誌文から成り、別冊とすること、前の孝宗実録の例に同じい。

〔四〕 この実録の現存するものは、江華本・太白山本・赤裳山本の三部で、いずれも同一の活字印刷本である。板匡、縦四一・七糧、横二六・三糧、每半葉十五行、行三十字。

〔五〕 昭和六年（一九三一）の京城帝国大学法文学部景印本は、太白山本に拠り、それを約二分の一に縮刷したものである。但し製冊は旧のまま和装二十三冊とした。

〔六〕 いまここに刊行する普及版李朝実録第三十七冊の顯宗実録は、財団法人東洋文庫所蔵の京城大学景印本に拠り、それをさらに縮写して、原本の四頁を一頁におさめたものである。

昭和三十八年十月

学習院東洋文化研究所

末松

保

和

顯宗実録目錄

卷一

己亥孝宗十年 （一六五九） 西曆	五月（辛酉朔）	一
己亥即位年	五月（辛酉朔）	四

卷二

庚子元年 （一六六〇）	六月庚寅朔	六
	七月（庚申朔）	五
	八月（己丑朔）	八
	九月己未朔	二〇
	十月戊子朔	三
	十一月戊午朔	五
	十二月丁亥朔	六
	正月丁巳朔	三〇
	二月（丙戌朔）	三
	三月（丙辰朔）	三
	四月乙酉朔	元
	五月乙卯朔	五

卷三

庚子元年	六月甲申朔	七
------	-------	---

卷四

辛丑二年

(一六六一)

七月甲寅朔	三
八月甲申朔	七
九月癸丑朔	古
十月癸未朔	大
十一月壬子朔	八
十二月壬午朔	三
正月(辛亥朔)	六
二月(辛巳朔)	八
三月庚戌朔	古
四月庚辰朔	古
五月己酉朔	四
六月戊寅朔	九
七月戊申朔	一〇
閏七月戊寅朔	一〇
八月丁未朔	一四
九月丁丑朔	一五
十月丁未朔	一六
十一月丁丑朔	一九

卷五

壬寅三年

(一六六二)

十二月丙午朔……………二二

正月乙亥朔……………二六

二月(乙巳朔)……………二八

三月甲戌朔……………三三

四月甲辰朔……………三四

五月(癸酉朔)……………三七

六月壬寅朔……………三三

七月壬申朔……………三六

八月辛丑朔……………四〇

九月辛未朔……………四四

十月辛丑朔……………四七

十一月(辛未朔)……………一〇

十二月庚子朔……………一五

卷六

壬寅三年

癸卯四年

(一六六三)

正月庚午朔……………一五

二月庚子朔……………一五

三月己巳朔……………一七

四月戊戌朔……………一七

五月戊辰朔……………一八

卷七

癸卯四年

六月丁酉朔.....一六

七月丙寅朔.....一六

八月(丙申朔).....一五

九月乙丑朔.....一六

十月乙未朔.....一六

十一月乙丑朔.....一四

十二月甲午朔.....一六

甲辰五年

(一六六四)

正月甲子朔.....一六

卷八

甲辰五年

二月甲午朔.....一五

三月(癸亥朔).....一六

四月癸巳朔.....一五

五月壬戌朔.....一六

六月壬辰朔.....一四

閏六月辛酉朔.....一六

七月庚寅朔.....一六

八月(庚申朔).....一五

九月(己丑朔).....一六

十月己未朔.....一六

卷九

甲辰五年

卷十

乙巳六年
乙巳六年

(一六六五)

十一月戊子朔.....二六

十二月戊午朔.....二四一

正月戊子朔.....二四

二月戊午朔.....二四九

三月丁亥朔.....二五三

四月丁巳朔.....二五五

五月丙戌朔.....二六一

六月丙辰朔.....二六六

七月乙酉朔.....二七〇

八月甲寅朔.....二七三

卷十一

乙巳六年

九月甲申朔.....二七九

十月癸丑朔.....二八三

十一月癸未朔.....二八八

十二月壬子朔.....二九〇

丙午七年

(一六六六)

正月壬午朔.....二九三

(壬午)

二月癸丑朔.....二九六

卷十二

丙午七年

三月(辛巳朔).....三〇二

四月辛亥朔.....三五

卷十三

丙午七年

丁未八年

(一六六七)

卷十四

丁未八年

五月壬午朔	三六
六月庚戌朔	三九
七月庚辰朔	三〇
八月己酉朔	三四
九月戊寅朔	三五
十月戊申朔	三六
十一月丁丑朔	三八
十二月丁未朔	三二
正月丙子朔	三八
二月丙午朔	四一
三月乙亥朔	四六
四月乙巳朔	五〇
閏四月乙亥朔	五一
五月甲辰朔	五二
六月甲戌朔	五五
七月癸卯朔	五七
八月癸酉朔	六二
九月壬寅朔	六四

十月癸酉朔.....三五

十一月辛丑朔.....三七

十二月辛未朔.....三八

戊申九年 (二六六八) 正月庚子朔.....三九

二月庚午朔.....三九

三月己亥朔.....四〇

四月(己巳朔).....四〇

五月戊戌朔.....四一

六月戊辰朔.....四一

七月戊戌朔.....四二

八月丁卯朔.....四二

九月丁酉朔.....四三

十月丙寅朔.....四三

十一月丙申朔.....四四

十二月乙丑朔.....四四

己酉十年 (二六六九) 正月乙未朔.....四五

二月(甲子朔).....四六

三月甲午朔.....四八

卷十五 戊申九年

卷十六

卷十七

己酉十年

四月癸亥朔.....四三

五月癸巳朔.....四七

六月壬戌朔.....四三

七月壬辰朔.....四五

八月辛酉朔.....四六

九月辛卯朔.....四三

十月辛酉朔.....四八

十一月庚寅朔.....四一

十二月庚申朔.....四五

卷十八

庚戌十一年

(一六七〇)

正月己丑朔.....四八

二月己未朔.....四六

閏二月戊子朔.....四二

三月戊午朔.....四三

四月丁亥朔.....四六

五月丙辰朔.....四六

六月丙戌朔.....四七

七月乙卯朔.....四一

八月乙酉朔.....四三

卷十九

辛亥十二年 (一六七二)

九月乙卯朔.....四六

十月乙酉朔.....四七

十一月甲寅朔.....四九

十二月甲申朔.....四三

正月癸丑朔.....四六

二月癸未朔.....四八

三月壬子朔.....四九

四月壬午朔.....四四

五月辛亥朔.....四六

六月庚辰朔.....四九

七月庚戌朔.....五一

八月己卯朔.....五三

九月己酉朔.....五六

十月(己卯朔).....五八

十一月戊申朔.....五一

十二月戊寅朔.....五三

壬子十三年 (一六七二) 正月戊申朔.....五七

二月丁丑朔.....五九

卷二十

辛亥十二年

卷二十一

癸丑十四年

(一六七三)

三月丁未朔	五二
四月丙子朔	五三
五月丙午朔	五六
六月乙亥朔	五八
七月乙巳朔	五〇
閏七月甲戌朔	五三
八月癸卯朔	五四
九月癸酉朔	五六
十月壬寅朔	五六
十一月壬申朔	五八
十二月壬寅朔	五九
正月壬申朔	五二
二月辛丑朔	五二
三月辛未朔	五四
四月庚子朔	五六
五月庚午朔	五八
六月(己亥朔)	五九
七月戊辰朔	五二

卷二十二

甲寅十五年

(一六七四)

八月(戊戌朔).....五十四

九月(丁卯朔).....五十五

十月(丁酉朔).....五十六

十一月(丙寅朔).....五十七

十二月(丙申朔).....五十八

正月(丙寅朔).....五十九

二月(丙申朔).....六十

三月(乙丑朔).....六十一

四月(乙未朔).....六十二

五月(甲子朔).....六十三

六月(甲午朔).....六十四

七月(癸亥朔).....六十五

八月(壬辰朔).....六十六

行狀.....五十二

哀冊文.....六十五

謚冊文.....六十五

誌文.....六十六

凡人之見美不為難抑恐其間亦有節節碍礙之事餘人亦皆從景與等
議遂令從大臣議施行○未刻中使林文問出言于院相鄭太和曰長主殿
梓官尺度不足持不可用矣太和與禮曹判書尹祥史判書判書宋時烈右容贊
宋汝吉共相善與同餘時各敘不語者至今不語耶抑相謝過厚耶善與對
曰彼有鏡已繫東錄衣至當有最廣度亦不過厚然梓官廣不足幾二寸許
長亦不足諸公須臾請率至當可矣太和與禮曹使沈之源請借入奉審尹祥
宋時烈宋汝吉金壽恒亦隨入進至錄衣下梓官人度度之長廣者皆不
足諸臣相顧失色同知兩指進出廳下聚首商議乃要傳令中官達于王
世子廣度請搜得廣板于城中及江上終不得其中用者太和謂時烈汝吉曰
廣板不得事急矣如非附板更無他策矣曰然太和與禮曹判書尹祥史判書
者請取廣板上品附附造成兩用之王世子始不許曰附板雖闊而用之
者猶且不為今安得為此言耶太和等更陳其萬無可得之狀乃下令曰其
選擇匠手趁今夜治梓內面及七星板須加漆可也臣謹按梓官制度定
自國初運用垂三百年無弊而今乃人度不足難板以用斯豈非當處暑不始
已矣

顯宗孝宗錄卷之一

五

校布之致歟至於長之不足尤是理外不善小敘灼然可見時烈方以知禮自
任而遂使君父之役用前古未有附板梓官堪其盛情不請改敘遂致選
終大禮有莫大之慶時烈之罪可勝誅哉太和身居院相既有敘布之不備而不
力爭見尺度之不足而又不請改敘先發附板之論順適時烈之意其心以為
先王可負而時烈不可恃也耶夫患失至於如此若論其罪誠於時烈者幾
何而置黃閣三十年唯其言是用意圖之亡者幸耳○兩司復請並行群臣
經狀之制以已定之禮不可猝改為答其後校理金萬基副司直閔禹重修撰
金萬均相繼上書請復古制皆不許○院相鄭太和達自初奏王世子王
孫駟馬皆令同處廬外外間舞情多以為未妥請自今以後並令出外王世
子答曰近日有該掌率使之出入非同處也○禮曹以即位擇日時事入達
下今日昨日日該掌率記中既有不忌開之語今者又定日時以入此何事耶
問達金壽恒達國性成服之日儲君嗣位非但古昔帝王通行之禮我朝
列聖亦莫不然此該掌率違制舉行者則無可問之事矣答曰此何時此何
舉措不為明憲直擇日時有若探試者然此予不知之事也○院相鄭太和與
鄭承旨趙時等達曰自古繼序之君必於成服嗣位誠以大寶之位不可一日

廢也列聖之所遵行五禮儀之所具載此實古今不易之典禮該掌之不為
稟請只擇時日者亦是有司常事非有探試之意也答曰嗣位於成服之日
者非人子情禮兩致忍為卿等又何忍不少為探試乎其坐令禮官更議○丁
卯王世子在大造殿廬下廬次○鄭太和趙時等復達曰伏承下今臣
等聚首痛哭不忍舉續臣等非不知孝思同極至情難抑第念王者繼統之禮
自仲也重古先哲王肅不強抑至痛抑踐大寶良以天位不可輕廢情不
自伸也臣等決不敢持此下今分付該掌伏願抑情節末以違先王之行
之禮答曰禮雖為大情不可廢卿等不顧於抑情之懷乎決不可強抑情理
而為此舉宜遵前令今禮官更議兩司合達王堂上劉請深思宗社付託
之重作法祖宗已行之禮答曰抑之情懷已論於院相矣更勿煩瀆○院
相鄭太和與禮曹使沈之源禮曹判書尹祥等達新梓官兩板付接洵合無欠
第念其重莫大之事少失兩宜復悔顧及亦不無及此時更議善處之道除已
奉審諸臣外請小敘時入侍原任大臣以下至令更為奉審王世子許之李
景奭李時白元斗約李應孝趙時李尚真元萬石具挺垣李殷相俞榮金萬均
李伯麟鄭重徽達入奉審記招承旨達曰臣等即入奉審事無未盡不敢更
已矣

顯宗孝宗錄卷之一

四

室他記矣○長生殿新梓官成內泰三次○戊辰王世子在大造殿廬下
廬次○已時奉移大行敘康於宣政殿○午時大敘領教軍府事李景奭
領議政鄭太和延陽府院君李時伯左議政沈之源原平府院君元斗約光南
府院君李學源禮曹判書尹祥史判書宋時烈右容贊宋汝吉大司憲李應
蕃行大司諫李尚真右承旨金壽恒校理金萬基注書李伯麟記事官鄭重徽
等俱入侍如小敘儀畢矣大行尸床於殿東止隅設橫官殿中近止設御
榻處也梓官在尸床橫官之間敘康陳衣金在橫官南端柱廬及滿項在
橫官外西南帷帳用絢色白橫絕殿平洪得箕鄭善興呂聖壽及內侍二人掌
敘事尹祥執笏如儀敘畢取通天冠赤烏內子梓官許問坐及視玉亦當
入否時烈以為不可太和頤頤善興曰已丑則如何曰用太和曰然則當入
宣宮矣遂續大臣以下皆痛哭而出○領議政鄭太和率百官達請必許
禮官之請一遵祖宗舊典答曰每聞此言五內分崩禮不可以不遵情豈
可以全廢斷無許從之理願諸卿諸子至懷勿煩也達達至四不許兩司
三達王堂三上劉猶不許大臣又啓請中殿曰明日乃成服之日而嗣
位重禮而今未定葬下達達不知兩出伏願自內勸勉答曰自內亦為開諭